

2019 年度 センター試験 日本史 B (本試験) 分析

全体概況

試験時間 60 分

大問数・解答数	大問数：6 題	解答数：36 問
難易度の変化（対昨年）	○ 難化 ○ やや難化 ● 変化なし ○ やや易化 ○ 易化	
問題の分量（対昨年）	○ 増加 ● 変化なし ○ 減少	
出題分野の変化	○ あり ● なし	
出題形式の変化	● あり ○ なし	
新傾向の問題	○ あり ● なし	

総評

大問別の配点比率は昨年と同じであった。難易度については、史料の読解問題で注釈が多く読みづらい文章が出題された。しかし、その他の正誤判定や年代配列で従来より判別しやすい問題が多かったため、全体として変化なしとした。また、昨年度は全体の 4 分の 1 程度が文化史に関わる問題であったが、今年度は大きく数を減らした。一方、出題形式では、従来頻出の写真・グラフ・地図問題が全く出題されなかった。これは過去 25 年を振り返っても一度もみられなかったことである。

大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	コメント
第 1 問	古代から近代の地名とその由来	16 点	歴史サークルの先輩・後輩の会話を題材とした問題。昨年と同様に北海道とロシアに関わる問題が出題された。従来であれば、第 1 問に図版問題が出題されやすい傾向にあるが、今年度は総評にも記した通り、出題されなかった。
第 2 問	原始・古代の歴史研究と資料	16 点	原始・古代の歴史研究と資料との関連性を題材とした出題であったが、テーマに直接関わる問題は史料読解だけであり、その他の設問は政治や外交に関するものであった。律令体制・負名体制の土地制度からの出題が 3 年連続で出題された。
第 3 問	元号と中世の政治・社会	16 点	今年、新元号が発表されることから予想されていた元号にまつわる問題。第 3 問は中世の戦乱からの出題が頻出である。今年度も治承・寿永の乱、元寇、中先代の乱、上杉禅秀の乱、永享の乱、寧波の乱が出題された。
第 4 問	近世の社会・政治・文化	16 点	近世は社会・経済史が頻出である。特に「農村」をテーマにした問題が多く、昨年同様「村」を題材にした史料読解問題が出題された。やや読解しづらい問題であったので、悩んだ受験生も多かったであろう。
第 5 問	近世・近代における公家と華族	12 点	昨年同様、幕末から 2 問、明治初期から 2 問が出題された。井伊直弼や安藤信正に関する問題は昨年も出題された。第 5 問は幕末と明治初期からの出題がここ数年定着しているので、その分野を中心に学習を進めるとよい。
第 6 問	近現代の日米関係	24 点	第 6 問では戦後史の問題が増加した。8 問中 2 問だけが戦前からの出題で、残りの 6 問のうち 4 問は完全な戦後史、2 問は戦前戦後の混合問題であるが、解答はいずれも戦後史の文章が解答であった。また、1990 年代の出題は近年みられていないが、今年は「湾岸戦争」や「PKO 協力法」、「新ガイドライン関連法」など 1990 年代の日米の軍事・防衛関係の問題が出題された。